

Title	オーストラリアの歴史的発展と現代の諸問題(一)
Sub Title	Australian historical development and contemporary problems (1)
Author	関根, 政美(Sekine, Masami)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1982
Jtitle	法學研究 : 法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.55, No.11 (1982. 11) ,p.1- 33
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19821128-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

オーストラリアの歴史的発展と現代の諸問題（一）

関 根 政 美

- 一 はじめに——研究の目的
- 二 模索期のオーストラリア植民地（二七八八年—一八三〇年代）……以上第一回
- 三 発展期の植民地（一八三〇年代—一八九〇年代）
- 四 保護・防衛期のオーストラリア（一八九〇年代—一九六〇年代）……以上第二回
- 五 新たな模索期（一九六〇年代——）
- 六 あとがき——オーストラリアの課題……以上第三回

一 はじめに——研究の目的

本研究の目的は、現代のオーストラリアがかかえる数多くの諸問題の中からいくつか重要と思われる問題を取り出し、その問題が発生して来る歴史的経緯、および今日の矛盾・相剋状況を明らかにすると同時に、以下にとりあげられる諸問題に對するオーストラリア人の態度、反応の考察を通して、オーストラリア社会・オーストラリア人の国民性、社会的性格を明らかにすることが目的とされている。このことによつて一九八八年に建国二〇〇年を迎えるオーストラリアの未来が展望し

えるようになるだろう。本稿にて取り上げる問題は以下の通りである。

- (一) 移民政策(「白豪主義」とオーストラリア)
- (二) 保護貿易・産業政策(国内幼稚産業の保護)
- (三) 国防政策(アジアの中のヨーロッパ)
- (四) 強制仲裁制度と労使関係

これら四つの問題を取り上げる理由を述べておきたい。これらの問題は、まず第一に、オーストラリア建国の歴史ととも古い問題でありオーストラリアの歴史・文化と非常に深く結びついている、すなわちオーストラリアの社会なり人間なりを理解し、その特質、価値体系、国民性を明らかにする上で、重要な戦略目標となりうるものだといえよう。第二に、これら四つの問題をめぐつてオーストラリアの世論が長い間分裂してきたのであり、現在も多くの議論を生み出している、すなわち、各々の問題がオーストラリア経済・社会に与える影響力と重味が一段と大きい。第三には、これら四つの問題は、一見無関係にみえるが、実際には相互密接に関連していると同時に、互いに矛盾するものでもあり、矛盾・相剋を避けてバランスよく調整することが大変難かしい。しかし、このバランスを達成することがオーストラリアの次の百年の発展にとつて大変重要なことである故に、見逃すことができない。以上の理由から、これら四つの問題とそれらの間の対立・矛盾を含んだ相互関係に注目する必要がある。

本研究の筋立ては以下の通りである。まずオーストラリア最初の一〇〇年の建国の歴史を簡単に振り返り、前述の四つの問題が登場してくる歴史的背景を明らかにする。その次に、これら四つの問題が登場してくる過程と二〇世紀における展開を扱う。そして、今日の矛盾・相剋の過程および未来展望を行なうことになろう。最終的には、今日のオーストラリアが直面せねばならぬ課題、「多元文化主義」と「脱工業化」の問題が、これら四つの問題との関連で発生してくる経緯が示される。

以上の議論を明確にするためにオーストラリアの歴史は四つの部分に区分される。

- (一) 模索期（一七八八年—一八三〇年代）
- (二) 発展期（一八三〇年代—一八九〇年代）
- (三) 保護・防衛期（一八九〇年代—一九六〇年代）
- (四) 新たなる模索期（一九六〇年代—）

以上の区分に従つたオーストラリアの歴史的發展を簡単に要約してみると以下の如くなるであろう。囚人流刑地として設定されたオーストラリアは、囚人流刑地であつたがためにその發展には困難がともなつた。しかし、大變な困難にもかかわらず、主要輸出産業（羊毛）を發見し、様々な障害と戦いつつ發展をとげる。これは一八五〇年代のゴールド・ラッシュによつて更にはずみをつけられ一九世紀後半には、大變豊かな生活水準を持つ國となる。しかし、豊かになつた一方で豊かな生活水準をおびやかす要因も増えてくる。その生活水準の保護・防衛を旨とする諸政策として前述の四つの問題が一九世紀後半より現われ、二〇世紀最初の数十年の間に發展する。しかし、こうした政策も二〇世紀後半になると國際環境の激變のおかげで見直し・廃棄が迫られる。⁽¹⁾それは、生活防衛を強調しすぎたために新しい時代に適應するための積極的な經濟・社會發展政策を疎かにしてしまつたことを意味する。⁽²⁾一九世紀の積極的發展から二〇世紀の消極的な發展政策への轉換は、現代のオーストラリアの動向を大きく規制している。その困難な課題をいかに乗り越えるか、その際にどのような問題が予測されるか、といった諸点が議論されることになるであろう。保護・防衛とは、苦勞して一九世紀後半に達成した高度なオーストラリア國民の生活水準をいかに維持するかという問題意識を反映して名付けられたものといつてよい。一八世紀後期、一九世紀初期の模索期と同じ模索活動が、保護・防衛という消極策をのりこえて必要とされるようになった経緯が明らかにされるであろう。

ところで、一国社会の研究というものは、本来、学際的なものにならざるを得ない。しかしながら、オーストラリア社会研究においては、豪日の経済・貿易関係ないしはオーストラリアの産業・経済に絞られた研究が多く、体系的で統合的な研究は少ない。むしろ、オーストラリアの政治、経済、文化、社会そして軍事の諸側面を統合的に捉えることは大変難かしい。それは単に、各々の側面を研究し並列的にならべることによつて出来あがるものでないからである。各諸側面の対立・矛盾を含みつつも、それらの間にみられる体系的・統合的連関が明らかにされなければならないからである。それ故、学際的アプローチといつても、多くの分野の違う人々が集合して研究するだけでは不十分であり、統合的な視野から一国社会の全体像が明らかにされなければならない。ここに学際的アプローチの困難がある。なぜなら、統合のための視点・枠組を發見し、同調を多くの人々から求めるということは至難の業に近いからである。⁽³⁾

また、学際的アプローチには、歴史的視点が含まれなければならない。それは、どこの国にも存在しそうな問題、例えば本研究で扱う四つの問題もオーストラリアのみの特殊問題ではないし、どこにもありそうであるが、それらの問題が生じてくる歴史的環境や現代の国際関係・環境によつてその国独自の性格や困難さを抱えこんでいることが多いものであり、そうした特殊性を無視しては正しい認識を期待することは不可能であろう。そこに歴史的考察の必要性が出てくるのである。本研究においてかなりの部分を歴史的過程の記述に費したのは、以上のような観点に従つたものである。先進諸国に共通な問題でありながら各国の独自の環境条件による特殊性の考察が必要なのである。本研究は、こうした歴史的アプローチを含んだ学際的な研究が将来なされることを想定しつつ、オーストラリア社会を統合的に把握するための第一歩としてなされるものである。

(1) その理由は、現在のオーストラリアの経済動向が語ってくれる。八二年の予測は以下の通り。

(4) 国内総生産 (Real non-farm GDP) 上昇率 三・六%

(5) 物価上昇率 (CPI)

一一・〇%

(イ) 平均賃金(週給)上昇率

(ロ) 失業者数(八二年六月)

一四・四%
三八万一千人

以上の予測値は、一九八二年の経済予測を行なった様々な予測の平均値である (McCann (1982))。失業者率は、だいたい六―七パーセント前後とみてよいであろう。全体としてみると、資源開発ブームのおかげで欧州より楽観的であるが、失業率、インフレーション等、今年のみならず当面の間は悲観的な予測が大勢を占めているといつてよいだろう。とくに、銀行、ビルディング・ソサイエティの住宅ローンの利率が一五―六パーセントにも上昇し、住宅購入者の悩みの種となっている。なお、一九八二年の六月、オーストラリア政府は、オーストラリアが「不況 recession」に突入したことを宣言 (Australian Financial Review, 24 June, 1982) した。オーストラリア経済・社会の困難の克服にあたって本研究でとりあげられる問題の解決が急務となっている。

(2) 本稿では、オーストラリアの社会福祉制度の問題について一切触れられていない。この側面は、別に扱う予定であるが、生活防衛の点で積極的な貢献をしたことは認めなくてはならない。しかし、今回は、オーストラリア人の工業化、経済発展に対する態度を第一の考察課題としているので省略した。工業化と社会変動がオーストラリア研究の基本とすれば、工業化をどのようにとらえているかがまず研究の第一歩となる。

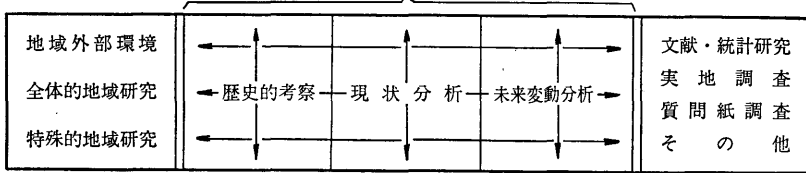
(3) オーストラリア社会を一つの地域とみなし、社会および国民の特質を明らかにすることを地域研究 (Area Studies) とすれば、当然のことながら、本文で指摘したように学際的なものにならざるを得ない。複雑な対象を様々な方法・視点から研究せねばならないからである。すなわち、生産技術・経済産業構造・人口構成・社会成層・社会移動、労使関係、社会福祉・社会問題、組織・地域社会・家族生活・人間関係、政治・法律体系、言語・規範・価値・文化体系(宗教を含む)といった個々の側面を含む広範な対象が存在する。それは単に、文献研究によるものばかりでは不十分であり、都市であれ農村であれ、日常生活の中に入り込み、人々の生活実態を重要な研究要素とせねばならない (文化人類学研究方法の応用)。また、本文で後に指摘するように歴史的考察も必要である。

一般に、社会の側面、例えば政治制度・過程を研究するにおいても、その政治をとり巻く社会、文化、経済そして歴史といった環境要因を考慮せねばならぬことは、いまだら指摘することもないが、こうした特殊研究をより進展させるためには、全体的な地域研究を必要とするといえよう。つまり、地域研究は、全体的地域研究と特殊的地域研究とを同時に進めることが最も望ましいといえよう。しかも、社会が今日のように、工業化・脱工業化の動きの中に巻き込まれている場合、当然のことながら、地域研究は「社会変動・文化変容」の研究とならざるを得ない。それは、工業化・脱工業化の衝撃のもとに変化するものとしなないものを明らかにするとともに、変化するものの方を見

オーストラリアの歴史的発展と現代の諸問題 (一)

地域研究 (Area Studies) の基本的枠組

社会—文化変動研究



学際的・統合研究

五 (一三〇九)

定めようとする(収斂・分散)研究との関連も考慮せねばならないだろう(変動研究の様々なレベルと問題については拙稿「一九八一(a)」「序」を参照されたい)。また、一つの地域社会(国家)が外部地域との関係を密接に持つ場合、外部環境(国家の場合、国際環境・関係)が視野に入つてくることとなる。地域社会研究を机上にて構想すると、大変、広範で複雑な性格を持つことが理解し得よう(前頁下図参照)。

もつとも、オーストラリア研究において、こうした意味での地域研究を必要ないとする者(本岡武「一九八〇年」一八頁)もいる。その理由は、豪州は東南アジアのように政治・社会が不安定でない故に、豪日関係を維持する上で、政変・社会不安といった経済外的要因の研究の必要が少ない。それ故に、経済研究を土台にして、他は必要に応じてつけ加えればよい、と主張する。これは豪日経済関係を維持・発展させるといふ実践的な観点からの主張であり、その観点からみる限り理解し得ない主張ではない。すなわち、東南アジアと貿易・経済関係を維持しようとしても、政変・社会的混乱があるため、社会・政治動向まで注目し相手社会の動向を探る必要があるが、オーストラリアの場合、基本的には白人社会であり、政治・社会的にみても大変安定している故に、攪乱要因として社会・政治の動向をつぶさに研究する必要はないというわけである。経済・貿易関係の維持という現実的な目的を土台とした議論といえるだろう。しかし、より広範な研究目的を追求する場合、すなわちオーストラリア社会の全体像を研究する場合、不十分な主張といわざるを得ない。また、経済関係を維持するとしても、経済を中心にやるだけでなく同じ重味を持つて他の関連分野の研究を行なう必要があると思われる。それ故、地域研究を静態的・閉鎖的な村落の文化人類学的研究として限定して考えるのは好ましくないとと思われる。

二 模索期のオーストラリア植民地(一七八八年—一八三〇年代)

(一) オーストラリア植民地設立の目的

第一期は模索期である。囚人植民地(Penal Colony)として出発した初期ニュー・サウス・ウェールズ植民地は、一七八八年の第一船団の到着以来、植民地自立のために、貧弱な労働力を土台とした厳しい自然との格闘、および植民地の経済的基礎確立のための輸出入主要産品の発見への努力をよぎなくされた。またその一方で、囚人流刑地対策用の統治機構をより一般植民地の統治機構に変容させるための植民地内の自由人および元囚人達による模索的な政治活動が開始されたのである。

そもそもなぜ現在のオーストラリア大陸に、囚人植民地が形成されたのかという問題をめぐつてオーストラリアにおける多くの歴史家がかしましく議論を続けている。基本的には二つのグループに分かれて論争が活発に行われている。「通説」を

唱える人々は以下のような主張をする。国王ジョージ三世が、一七八七年一月二二日に流刑地としてのオーストラリア植民地設営を公示したその直接的な原因は、一七七六年に北アメリカ大陸において発生したアメリカ独立戦争にある。つまりそれ以前、イギリスは毎年、約千名程の囚人を強制労働力として送り込んでいたが、戦争開始とともにその送り先を失つてしまつたことに求められる。当初は、その場しのぎの代替案としてチームズ川や英国南部の河川に廃船 (Hulk) を利用して流刑囚を収容したが、結局、増大する囚人による衛生・保安の状況悪化を招き、緊急に新たな流刑先を決定する必要に迫られた。一七八三年、独立戦争が英国側にとつて予期せぬ敗北に終つたとしても、労働力を必要とする合衆国には囚人の受け入れを拒絶する理由はないだろう、という楽観的な予測もあつた。しかし結果としてこの予測は甘すぎた。他の手段として英国政府は当時の植民地であつたカナダ、西インド諸島、あるいはアフリカに目をつけた。しかしながら、これらの候補地には該当地として決定を下すにはいくつかの障害があつた。

例えば、カナダはすでに多くの白人入植者達が存在しており治安問題の処理が困難であり、実際、白人達の反対にあつてゐる。西インド諸島では黒人奴隷商の利益と競合し、黒人奴隷の値くずれを案じた奴隷商人の反対にあつて拒否された。また東アフリカあるいは南西アフリカは、土地が荒涼としており、原住民とのトラブルの可能性も多く、その上に、なによりも囚人および囚人監視人の白人には気候が厳しすぎる、などの反対意見が多かつたのである。そのような時、すでに一七七〇年にキャプテン・クック (Captain James Cook) によつて発見されていたオーストラリア大陸の東海岸が気候・風土の点においても又、原住民の数・性格においても問題がなく、最適地として強調された。当地は早くから候補地として推奨されていたにもかかわらず当時の政治家に無視され続けてきた最大の原因は、英国よりあまりにも遠く隔たりすぎているという地理的悪条件、すなわち△距離の暴虐 (The Tyranny of distance) ∇が悪夢のごとく彼らの思考をさえぎつていたのである。しかし、流刑地決定の緊急さがより認識されることにより、一七八七年五月、囚人約七五〇名と軍人・船員等を含む一四〇〇余名か

ら成る第一船団が初代総督 A・フィリップ (Arthur Phillip) に率いられて現在のシドニーの南に位置するボタニー湾に向かつて出航したのであつた。⁽¹⁾ この流刑囚処刑問題にオーストラリア植民の基本的原因を求める説が通説になつてゐる。

この流刑囚処刑問題起因説に対していくつかの疑問を投げかけ、新たな説を唱える人々が現われてきている。この人々は単なる囚人流刑地としてのオーストラリア選択以上の意義を当地選択決定のなかに見い出そうとする。つまり、より重要な要因が働いているのに違ひないと考え、従来の通説を根本から検討しようとするものである。前者の説が囚人流刑に関する要因にその基本的原因を限定しているのに対し、後者はいくつかの要因から説明を加えようとしている。その一つの試みが軍事的要因の主張である。キャプテン・クックがオーストラリアの東海岸を探險した際に持ち帰つたニュージールランドおよびノーフォーク島産のエゾ松 (Tine Tree) と麻は当時の大英帝国海軍の軍艦の帆柱や帆布として適切であると考えられ、その採取・育成を主たる目的としていたのではないか。あるいは彼らによる妨害を避けるためにオーストラリアの南と東をぐるりと回る迂回路において他の列強諸国との衝突、あるいは彼らによる妨害を避けるためにオーストラリアの南と東をぐるりと回る迂回路を開発する必要があつたのではないか。さらにより一般的な見地から、当時の帝国主義政策の一環としてオーストラリアが軍事基地ないし補給地として重要視されていたのではないか、等々。これらの説を唱えるグループは囚人流刑処刑の問題を全面的に否定してゐるのではない。むしろ通説の狹義的解釈に加えて考えられ得る他の解釈を付け加え多角的な方面からの考察を試みようとするものである。

この囚人流刑処刑問題起因説⁽²⁾ および⁽³⁾ 軍事的・経済的・政治的起因説⁽⁴⁾ の論争に結着をつけることは現時点では不可能なように思われる。本稿においてはオーストラリア植民にまつわる原因論の存在を提示するだけに留め、その論争に加わることはあえてしない。しかし、強調しておきたいことは、その当時の官界および一般の人々の議論を土台とした現代のオーストラリア植民⁽⁵⁾ 原因・目的⁽⁶⁾ 論争から類推しえるように、どんな形であるにせよ、当時の人々の多くは、流刑地として

あれ、そうでない他の目的のためであれ東部オーストラリアは、必ずや利益を英国本国にもたらすであらう、あるいはそこまでいかずとも現実の植民活動に対し大きな困難はなからうと考えていた、すなわち、当時の人々はかなり樂觀的に考えていたということである。しかしながら、こうした当時の多くの人々による樂觀的な予測が逆に災いして後述の如く現実のニュー・サウス・ウェールズ植民地は、最初からその生存のために困難な戦いを強いられる運命となつていたのである。また、現代においても、過去においても、オーストラリア植民に関する議論、《原因・目的論争》が大変盛んであつたが、流刑植民地としてオーストラリア大陸における植民地が設定され、そのことが後のオーストラリアの発展を規制し続けたということは間違いない事実であつた。そして、それ故に予想以上の困難がさらに植民の際にとまつたということも強調しておいてよいであらう。

(二) 第一船団の苦闘とその成果

ニュー・サウス・ウェールズ流刑植民地が生存し続けるためには以下の二つの条件を備えていなければならなかつた。まず第一に農業を基盤とする自給自足経済を確立すること。第二には、輸出品を發見することによつて外貨を獲得し、必要物資の購入を可能にすること。つまり、そのことによつて英国政府の負担を軽くすることであつた。本来、流刑とは、七年、一四年、ないしは二一年もの長期に渡つて刑期を務めなければならない囚人を国内の刑務所に収容するかわりに、労働力不足で悩む植民地に低廉な労働力として売り払う制度である。この制度を活用することは植民地に対しては労働力の廉価な入手を可能なものとし英国政府に対しては経費の節約の上に罪人の懲罰をかねることを約束するという、双方にとつて大變、好都合なものであつたばかりでなく、囚人自身に対しても時間外労働から多少の賃金を稼ぐことができ、しかも労働による改心と将来の再出發のための蓄えも決して夢ではないという希望を抱かせる余地を与える、という結構づくめの制度である

(3) とりわけ英国政府にとつては、何よりも経費の節約に強調が置かれるはずであつた。すなわちニュー・サウス・ウェールズ植民地を流刑地と設定した以上、国内に流刑囚を維持していくよりも経費がかからなくて済むことが第一条件である。かくして、ニュー・サウス・ウェールズ植民地の短期内の産業・経済的自立のための二つの条件がいやおうなしに英国本国の圧力によつて促されたのであつた。

当初、キャプテン・クックおよびクックの探險航海に加つた植物学者バンクス(Sir Joseph Banks)による報告には、オーストラリア東海岸は気候も良く、土地も肥沃で、緑にも恵まれ、水資源にもこと欠かない好条件の土地・風土を有していると記されている。政治家が懸念した最大の障害は通説が指摘するようにこの植民地が遠隔地に位置するために輸送コストがかかること、また貿易による経済的利益に関して疑わしい点があることであるが、その点を除けば気候・風土において流刑植民地としては魅力ある場所と考えられていた。(4) それ故に、第一船団には約七五〇名の囚人のほかに、わずか二年分の食料および必要物資しか積みこまれていなかつた。これは植民活動が二年の間に軌道に乗ることを予測して見積られた量であつたが、この見積りは、前述のごとくはなはだ楽観的なものであつた。現実には、二年後に待ちうけていたものは繁栄ではなく、全員が餓死寸前というすさまじい状況であつた。その理由は主に当初のバンクス報告をそのまま鵜呑みにした政府の誤算に由来する。(5) どの点が、誤算であつたのだろうか。列挙してみると以下の通りである。

(一) 期待通りの肥沃な土地を発見することができなかつた。肥沃な土地はあることはあつたが、それはパラマッタおよびホークスバリー河流域で、上陸地点(ジャクソン湾)からかなり離れている。

(二) 地質の違いから英国より輸送した農耕器具を十分に使いこなすことができなかつた。また農業用の種子もこの土地には適さなかつた。

(三) 飲料用および灌漑用に都合の良い河川が不足していた。

以上の土地条件にアボリジニー（オーストラリア原住民）の襲撃による妨害が加わった。これらの外的な悪条件のほかに植民者側に内在した悪条件がさらに状況悪化に拍車をかけた。すなわち、まず第一に、植民地運営の中心となるべき総督をはじめ、その事務官、および武官、兵士のなかに農業に関する十分な知識を有する者がいかなかった。第二に、囚人の多くは都市出身者であるために農業にうとく、家畜の管理能力に欠け、数少ない貴重な家畜に逃げられてもただ指をくわえて見てい
るだけであつた。第三に、囚人労働力そのものの労働能力も低く、労働意欲も乏しい上に病氣もちが多かつた。彼らの関心は水が上から下に流れるごとく農業経営から本職の盗つと稼業に向けられていつた。その結果、第一船団到着二年後に囚人に許されていたものは、雨風から身を守るポロと餓死から身をふせぐ一日わずかの割当食料であつた。それ故、一七九〇年六月三日に第二船団のジュリアナ号が到着しなければ第一船団の全滅は避けられなかつたであらう。⁽⁶⁾

もつともこの船団に属していた食料等物資補給船「ガーディアン」が沈没したため、補給物資の増加が期待出来ぬまま囚人数を倍増させることとなり植民地は更に困窮に陥つた。しかし、二年もの間本国からの何の音信・補給もなく、見捨てられたのではないかという不安と焦燥がかられ、絶望感が漂い、植民意欲も失いかけていた植民地にとつては、この第二船団によつてそうした疑惑を取り払うことが出来、精神的に大変良い結果をもたらした。その後、苦しい植民活動が続けられたが、一七九二年に帰国することとなつた総督フィリップは、この植民地が将来の英国にとつてかけがえのない存在となるだろう、という予測を残すことが出来たのである（Crowley [1974] ch.1 by A. G. L. Shaw, p.12）。

(三) 流刑植民地における産業的發展とその障害

飢餓線上をさまよう人々を抱えた植民地には当然のことながら、輸出品の探索に専念する余裕はなかつた。⁽⁷⁾ 植民地そのものの確立への基礎固めが始まつたのは、第二船団以後、囚人および物資の輸送船が毎年送られるようになってからであ

る。物資の十分な供給は植民地の基礎確立とともにインド、中国との貿易をも促すようになった。⁽⁸⁾ この貿易に手を出し、後までも独占し続けたのはニュー・サウス・ウェールズ植民地の治安維持のために特別に編成されたニュー・サウス・ウェールズ軍団の士官達であつた。当時の貿易は輸入品の購入が中心であり、その支払は主に英国大蔵省の発行する手形であつた。それ故に英国大蔵省は植民地維持に多くの資金を投じなければならなかつた。この出費の削減を計るための努力が英国政府によつて歴代の総督に課せられた最大の課題であつた。そのためには、農業・輸出業の発展の他に、植民地貿易の実権を握つていたニュー・サウス・ウェールズ軍団の士官達を統制せねばならなかつた。彼らは、植民地における英国大蔵省手形の支出を自由に管理していた上に、自らの給与を元手に投機的な貿易業に手を出していた。彼らは、囚人監視業務、植民地内の治安維持そしてアボリジニーによる攻撃から植民地を守るといふ任務を課せられた特別編成の軍人達であつたが、白人逃亡囚人ではとても適応出来ない風土のおかげで囚人の逃亡意欲が少くないこと、また原住民達も比較的大人しく、攻撃用武器も大変幼稚なものであつたため、彼らは商業活動に十分暇をさくことが出来た。彼らは、単に植民地貿易のみならず、⁽⁹⁾ 恩赦を受けて自由になつたエマンスピスト(Emancipists)や刑期終了した元囚人を部下にして植民地内流通機構も支配していた。それ故、彼ら士官達の私利私欲に基づいた商業活動を統制し出費を抑える必要がまず第一であつた。しかし、ニュー・サウス・ウェールズ軍団士官を統率することが出来ず、そのために、植民地支出の過剰増加を阻止し得なかつた総督が更迭される事態さえも生じた。第二代総督ハンター(John Hunter R. N. 1795-1800)がその良い例であつた。⁽¹⁰⁾

総督ハンターの後をついだキング総督(Philip Gidley King 1800-1806)は英国政府の要求に忠実にこたえることによつて前任者の二の舞いにならぬように努めた。⁽¹¹⁾ この姿勢は多くの波紋を投げかけた。とりわけ、大蔵省発行の手形による貿易および植民地内の流通機構を支配していた植民地軍団の士官達には大きな打撃であつた。しかしながら、これらの士官達のなかには南太平洋に進出し、輸出品を発見することによつて植民地予算の縮小に伴う貿易上の損失を補おうとする企画に乗り出

す商魂たくましい士官もいた。またこの頃には、エマンシピストないしは元囚人のなかでもニュー・サウス・ウェールズ軍団士官の手から独立し、商業活動に従事するようになった者も増えており、従来、士官によつて独占されてきた植民地貿易に対抗できるまでに成長した者も幾人かいた。また、植民地の確立に伴い、インドのカルカタ等の外国からの商人によつて支店がニュー・サウス・ウェールズに設定されるようになり、大蔵省手形よりは、より利益のあがる輸出品の発見に努力が向けられるようになった (Steven [1969 (a)] pp. 123-130)。このエマンシピストと貿易商人に対してキング総督は士官貿易独占弊害排除の目的から優遇処置を講じた。その結果として植民地内の貿易をめぐる競争が激化し輸物産発見への情熱が昂揚した (Abbott [1969 (b)] p. 167)。

ところで、現在、オーストラリアの輸出品といえは、多くの人が「羊毛」および農産・牧畜製品、さらに資源ブームによる石炭・鉄鉱石等を思い浮かべるであろうが、当時の輸出品の中心は「なまこ」、アザラシの「皮と油」、およびクジラの「油と骨」、すなわち海産物にあつた。つまり、今日とは全く異なつた産業に経済的基盤が置かれていたのであつた。一八世紀末期から一九世紀の極初期にかけては小麦粉、材木、石炭、白檀およびウールなどが輸出品として試みられていたが、貿易品として採算にあうものは先の海産物と白檀であつた。とくに白檀、なまこ、アザラシの皮と油、クジラの油と骨が中国や英国に輸出されるようになると植民地経済も自給への道へと一歩前進するようになった (Steven [1969 (c)] pp. 285-305)。さらに、こうした海産物品を中心とした南太平洋貿易による輸出主要産品の発見に努力を注ぐかたわら、陸地においても英国における羊牧地と類似した土地がかなりあることに注目し、太平洋貿易での利益をもとに羊(主にメリノ種)を南アフリカより輸入し、その育成に精を出す者も現われ始めた (Abbott [1969 (c)] pp. 220-225)。かくして第三代総督キングの統治時代には多くの商業活動が活性化された。この現象の一つには、一七九〇年代から一八〇〇年代にかけてホークスバリーおよびパラマツタを中心とする農業活動が軌道に乗り、余剰産品の産出も可能になつたために一部ではあるが農業から商業へと転

出していつた者も現われるほどに農業が発達してきた、という事実によるものである (Abbott [1969 (a)], p.148.)。

しかしながら、植民地の發展を大幅に規制するいくつかの問題があつた。海上においては①英国東インド会社による中国を含むアフリカ以东の貿易の独占、②英国本国の海運の利益を守るための航海条例の存在、③英国本国のアザラシ狩船団および捕鯨船団との競合、④米国捕鯨船団との競合。さらに陸地においては⑤羊毛輸出をめぐる英国羊牧業界との競合。これらの厚い障壁が幼い植民地の前に立ちはだかつていた。⁽¹⁴⁾ 第一の障害である東インド会社のインド洋・東南アジア海域における貿易の独占は植民地による直接的な貿易の阻止、および植民地側の利益の搾取を意味した。さらに、第二の航海条例は英国との貿易はすべて英国船によつて行ふことを義務づけるものであるために、植民地は更に利益の搾取に甘んじなければなかつた。また、植民地における造船の規制は貿易それ自体だけでなく、植民地内造船業およびその関連産業の成長を阻害するものであつた。第三の英国捕鯨船団との競合は、結局、英国捕鯨会社の政治的圧力の結果として、植民地産品に対する高

第2-1表 英国輸入関税の一例 (1樽当り)

	英国船	植民地船
鯨 蠟	15s 9d	£24 18s 9d
ごんどう鯨油	10s 6d	£ 8 8s
象あざらし油	10s 6d	£ 8 8s

資料出所：Steven [1969(0)] p.299

関税という形でしわ寄せが来た (第2-1表)。第四の米国の捕鯨船の場合には、東インド会社の制約の枠外に位置しているためにシドニーを基地として自由に貿易ができるという利点を有する上に、南太平洋にまで進出しようとする精力的な意欲は東インド会社にとつてもその利益をおびやかす存在であつた。いわんやその存在は植民地にとつてはまさに脅威そのものであつた。第五の羊毛に關しては、すでに一八〇〇年前後からスペインおよびドイツ羊毛にその存在を脅かされていた英国は、輸入毛に高い関税をかけることによつて英国羊牧業界の保護に努めた。植民地羊毛もクジラヤアザラシと同様、例外の対象とはならなかつた。庇護下にある植民地とはいえ、一たび本国英国との間に利益上の競合が生じれば、そこには苛酷な経済戦争という現実が待ち受け、幼ないニュー・サウス・ウェールズ植民地は産声とともに厳しい世界と対座せざるを得なかつたのである。

他方、こうした対外的な荒波に立ち向かつていたこの時期に植民地内において政治的な嵐が吹きあれ始めていた。囚人植民地としてあくまでもその性格を維持すること、英国本国の商業・貿易上の利益を守ること、植民地貿易商によつて独立小農経営者の利益が搾取されぬように監視すること、これらが植民地の総督に課せられた任務の一つであると解釈した第四代総督ブライ (William Bight) はこの任務を忠実に遂行するためには商業発展を最低限度にとどめ、この植民地が囚人流刑地として出発した本来の目的、すなわち囚人の強制労働およびエマンスピストと元囚人の独立小農経営に基づく農業社会として発展すべきであるという考えに固執するようになった。そして彼は、その目的を達成させるためには、植民地内において通貨として利用されていたラム酒の輸入・流通を阻止し、囚人をはじめとして多くの植民者が泥酔し、アルコール中毒とならぬようにすることが先決と考え、このラム酒貿易を行なつていた植民地貿易商および士官達と対立する構えをとつたのである。この姿勢は、ブライ総督の「バウンティ号の反乱」を自ら導いた潔癖さと同時に短気で興奮しやすい性格も手伝つて、個人的利益を最大限に追求しようとした植民地貿易商人およびニュー・サウス・ウェールズ士官やその退役軍人の間に強烈な反感をひきおこした。その反感は一八〇七年にはブライ総督に対する反乱にまで発展していつた。結局、反乱そのものはブライ総督の追放によつて結着がついたが、その後、当時、羊牧業に着手していたニュー・サウス・ウェールズ軍団退役士官マッカーサー (John Macarthur) は後に首謀者として反乱を扇動したかどで英国に十年近くの間幽閉される身となり、植民地を離れなければならなかつた。⁽¹⁵⁾ 彼の損失は、一時的ではあるが植民地経済に動揺を与えた。しかしながら、こうした混乱にもかかわらず、植民地の経済発展への努力は、英国からの圧力をはねのけて成長しようとしていたのである。

(四) 初期植民地の産業的發展と社会的發展

幸運なことにこれらの植民地の發展の前に立ちはだかつていた障害のいくつかはとりのぞかれ始め、状況はニュー・サウ

ス・ウェールズ植民地にとつて都合の良い方向に好転していった。第一、第二の障害であつた東インド会社、および航海条例による規制は中世的遺制であり、自由貿易の発展をさまたげるものであると批判し、その改善を要望する者が英国内においても生まれて来たために、一八一〇年代に大幅な改善がほどこされた。特に、前者が一八一四年に独占的活動範囲を中国貿易にのみに限定されたことは植民地にとつて大きな救いであつた。また英国捕鯨船団もオーストラリア近海までの航海にともなう高コストのためと、植民地との競合のために圧力集団としての力を衰退していった。それに加えて、英国政府による植民地経済への配慮から、関税が引き下げられた。さらにアメリカ捕鯨船は全般的に鯨の乱獲から捕鯨不振に陥り、漸次、中国貿易からその姿を消していった。羊毛輸出においても厚い障壁は打ちくだかれて行つた。一八一三年にシドニー東方約一〇〇kmにあるブルー・マウンテン山脈のかなたに広大な牧草地が発見されたこと、また、英国において工業化・都市化の進展により良好な牧草地が減少したこと、および羊の品種改良が工業用羊毛に不向きになつたために英国羊牧業界が不振に陥つたこと、などが幸いして、輸入への制約をとり除く条件が熟していった。さらに、一八一九年から二〇年にかけて、植民地の状況を視察に来たトーマス・ビッグ (Thomas Bigge) がこの植民地は単なる囚人流刑地ではなく、経済発展、とくに羊毛の発展の可能性を持つていることを指摘し、ドイツ、スペインの羊毛に頼らなくても十分であるのでむしろ植民地羊毛に対して優遇措置を講じるべきであると英国政府に報告したこと、一八一七年に幽閉先からもどつたマッカーサーがロンドン滞在中に羊毛の品種改良技術を学び、上質品種の製造に成功したこと、などの好条件が続出した。とりわけマッカーサーの羊毛は一八二二年に英国技術協会より表彰され、その翌年、植民地羊毛にはドイツ羊毛やスペイン羊毛に比べて遙かに低い関税の体系が適用されるようになった (Roberts [1938] pp.41-42)。

これらの条件の変化は植民地にとつて有利なものであつた。しかしながら、植民地経済・社会そのものにも変化が生じていた。①一八〇〇年代、一八一〇年代の乱獲がたつたつて、アザラン捕獲量が減少し始めたこと、また、沿海捕鯨も同様な限

界をみせはじめたことが植民地内の商業・産業構造に影響を与えたこと、②英国における不況が結果として植民地貿易の不況をもたらしたこと、③貿易が英国、インド、中国との間に確立することによつて、貿易に関する作業そのものが専門的知識・経験を必要とするようになり、国際的組織化、すなわち官僚制化、プロフェッショナル化していくことにより、従来の士官・退役士官ないしはエマンスピストや地主といった投機的素人貿易商の参入する余地が少なくなり、しかも利潤も減少するという条件が重なつたこと。以上の理由から植民地エリート階級の目は海上から陸上へと向けられていつた (Steven [1969 (b)] pp.184-185.)。そのほこ先は、一方においては輸入品代替工業、および輸入不可能品目工業への進出であり、他方においては広大な牧草地を土台とする羊・牛等の牧畜業の発達であつた。残念なことに、前者は植民地内の労働・資本不力足と、英国工業界の利益を守るといふ英国政府の反対にあつたためにその発展は遅々として進まなかつたが、後者は、英国工業界との利害が一致したために、急速に発展して行つた (Steven [1969 (b)] p.184-185.)。一八一〇年代に始まつたこのような産業の構造的変化によつて、一八二〇年から三〇年代には、植民地内において経済競争が繰りひろげられ、遂には羊毛輸出が海産物品の輸出を凌駕するまでに至つた (第2―2表)。

こうした産業構造上の変化は、従来、この植民地を囚人流刑地とみなしていた英国政府および一般英国国民の植民地に対する態度変化を促すこととなつた。すなわち囚人の流刑地としての地の果て、世界の果て、という認識から、新しいフロンティアとしてのオーストラリアという認識への移行である。¹⁹⁾一八二〇年代になると、英国政府は、一定の資本(五〇〇ポンド以上)を所有する中産階級を植民地に送り込み、彼らに一定の土地を下付し、農業あるいは牧畜を営ませ、労働力としての囚人および元囚人を使用させるといふ形で、植民地開発に対して積極的な姿勢を示すようになった。毎年数百人単位で移民が送り込まれるようになった一八二〇年代には、²⁰⁾シドニー周辺の地域に限られていた植民地は急速に、南北、および内陸へ向かつて拡大しはじめていた。イギリス市場における植民地羊毛の占める割合も一八一〇年には三・八%にすぎなかつたもの

第2-2表 ニュー・サウス・ウェールズ植民地輸出統計(1830—50)

年 度	海産物品 (Fishery)		羊 毛 (Wool)		全輸出額 (£)
	輸 出 額 (£)	輸出比率 (%)	輸 出 額 (£)	輸出比率 (%)	
1830	59,471	42	34,907	25	141,461
1835	180,349	26	299,587	44	682,193
1840	224,144	16	566,122	40	1,399,687
1845	96,804	6	1,009,242	65	1,555,986
1850	29,368	1	1,614,241	67	2,399,580

資料出所: Little [1969] p. 125.

第2-3表 英国の羊毛輸入 (輸入比率)

	1810	1830	1840	1850
オーストラリア	3.8	8.1	22.0	47.0
ド イ ツ	8.0	75.8	33.9	10.6
ス ペ イ ン	80.0	11.1	3.8	3.4
そ の 他	8.2	5.0	40.3	39.0
合 計	100.0	100.0	100.0	100.0

資料出所: Roberts [1935] p. 45.

第2-4表 ニュー・サウス・ウェールズ
植民地人口 (1792年10月12日)

	男	女	子供	合計	比率 (%)
文官・海事裁判官	27	3	4	34	1.1
士 官・軍 人	351	31	34	416	13.4
自 由 人	67	4	1	72	2.3
自由入植者	11	24	—	35	1.1
元囚人入植者	52	—	—	52	1.7
エマソンビスト	8	2	—	10	0.3
囚 人	1,948	414	—	2,362	76.0
子 供	—	—	127	127	4.1
合 計	2,464	478	166	3,108	100.0

資料出所: Clark [1962] p. 130.

第2-5表 ニュー・サウス・ウ
ェールズ植民地人口 (1823年)

	男女計	比率 (%)
自 由 移 民	1,307	5.5
植民地生まれ	1,495	6.2
エマソンビスト	1,121	4.7
元 囚 人	3,255	13.6
囚 人	10,873	45.4
子 供	5,668	23.8
船 員	220	0.9
合 計	23,939	100.0

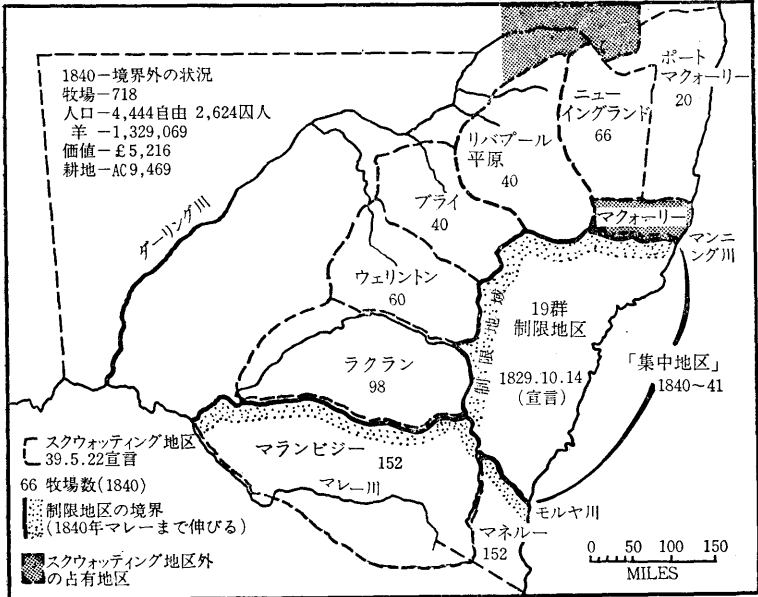
資料出所: Greenwood [1974] p. 13.

が、一八三〇年には八・一%へと延びていった(第2―3表)。

かくして、オーストラリア社会は羊毛産業を輸出の中心とする羊の国へと変わっていった。この羊牧業の発展によつて自由移民(Free Settlers)、ないしエマンシピスト・元囚人の人口内に占める割合も増加し、植民地経営の中心的存在になつた(第2―4表及び第2―5表)。そうなると彼らは総督および英国政府に対して政治的制度改革を要求するようになった。⁽²¹⁾本来、この植民地は囚人流刑地として設定されていたために、刑事裁判は軍人陪審員によるものであり、民事裁判は陪審員なしの三人の判事によるものであつた。また上級裁判では総督自身が判事となつていた。行政・立法に関しては、総督が国王の名代として専制的な権力を持つていた。このような制度は囚人および軍人の占める割合が大きかつた時代には都合の良いものであつたが、自由人の増大とともに不適当なものと判断されるようになった。英国政府は一八二〇年代になると、こうした植民地の状況変化を考慮に入れるようになった。すでに一八一〇年代には総督裁判所かわりに最高裁判所が設置されたが、一八二〇年代にはより積極的な改革が施された。一八二三年に初期植民地憲法が導入され一八二八年には改正された。選挙制度そのものはなかつたが、総督の推薦・国王による任命という形で国会制度が不十分ながら導入され、上院議会制度(the Legislative Councils)が形成され、司法の独立も果たされた。

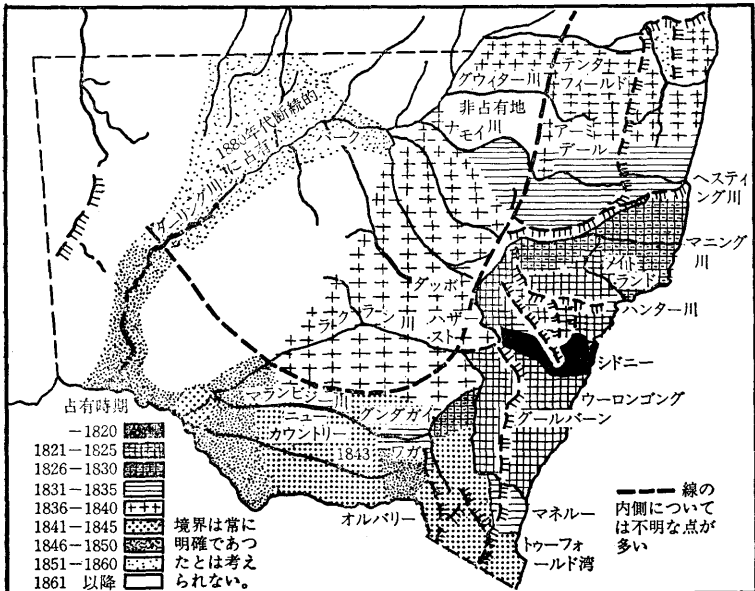
しかしながら、こうした囚人植民地から一般植民地への動きは逆に囚人およびエマンシピスト・元囚人に対する締め付けが厳しくなつていく過程でもあり、公職からのエマンシピスト・元囚人の追放へとながつて行つた(Clark [1962] p. 372)。また同時に植民地が南北および内陸へと拡大していくにつれて、この拡大に応じた警察能力が増大できずに囚人の逃亡や強盗、密造酒販売などの治安問題を生み出して行つた。さらにアボリジニーの攻撃からの防衛能力も減退しはじめたために、総督は一八二九年に一九郡制限地区を設定し、この一九の地域以外の土地占有者に対しては権利および生命の安全を保障しないという宣言をせざるを得なくなつた(第2―1図)。しかしながら、ヨーロッパにおいて、ドイツ羊毛も自国の都市化・

第2-1図 19郡制限地区とその周辺 (ニュー・サウス・ウェールズ植民地)



資料引用：Roberts (1935) p.139

第2-2図 スクウォッターの占有地域(1820年以降の発展)



資料引用：同上

オーストラリアの歴史的發展と現代の諸問題 (一)

工業化の波が押し寄せることによつて衰退したために英国による植民地羊毛への需要が増加した。そのために植民地内において羊牧産業の境界外への拡大をおさえることはできなくなり、治安維持問題は増幅されていった⁽²²⁾。こうしたことから囚人流刑に対する疑問、および囚人労働力の能率や僻地強制労働のもたらす改心への影響力に対して疑義が生じ、遂に、一八三〇年代には囚人流刑そのものに反対する動きが強まった。この反対は増大した移民によつて支持され、一八四〇年には英国政府をしてニュー・サウス・ウェールズへの囚人流刑を中止させる程にまで進展していったのである⁽²³⁾。かくして、一八三〇年代の羊牧業の発展が農業の発達とともにオーストラリアの経済的基盤を確立するに至つた時点で第一期の模索期は終了する。すなわち、オーストラリア生存の為の条件としての農業の確立、および輸出品の発見(海産物・南太平洋貿易から羊牧業へ)を通じて一般植民地としての認識に目ざめ、社会構造の変革を生み出して行く苦しい模索期から発展期へと移つていくのである。これはとりもなおさず、ヨーロッパより遠く隔つた地の果てに英国文明を移植し、育て上げていくとする方向に植民地オーストラリアの人々の目が向けられて行つたことを意味すると言つても過言ではないであらう。

(1) 船団に乗り組んだ者の内訳は以下の通りである。船員(四四三)、囚人(男一五六八、女一九一、子供一三名)、軍人(兵士一六〇、士官および下士官一五一)、軍人の家族(妻子一四六)、総督(一)とスタッフ(九)という構成であつた(Crowley [1974] ch. 1 by A. G. L. Shaw, p. 6)。
(2) オーストラリア植民地開設の基本的原因・目的に関する議論が以下の文献に収められてゐる。Martin, G. (1978)。本稿はこの文献を土台としてゐる。なお、この論争は、近年においては一九五二年、Dallas [1952] が本文にて示した通説に対し批判をなげかけ、一九六六年、Blainey [1966] によつてさらに用意周到な議論が展開されたが、それ以来継続しているものである。この批判に対して通説も反批判を行なつてゐる。その論点を簡単に示すと以下の通りである。

- (一) 通説批判者の論理はもつともらしいが、一七七〇〜八〇年代のイギリスにおける公式文書による裏付けが乏しい。
- (二) 通説を支持する公式文書は、それに対して多い。
- (三) 流刑コストが高いという批判は、初期には妥当するが、全体として割高であつたとはいえず、初期の目的は達成した。
- (四) 麻や木材は、イギリスに近いところで採取・獲得できるのであつて、海軍用材料獲得説は根拠薄弱である。
- (四) 当時、東インド会社が存在し、オーストラリアもその範疇にあるので、経済的利益を損ねる企てが東インド会社に対して計画される可能性は少

オーストラリアの歴史的發展と現代の諸問題 (一)

二二 (一三二六)

ない。しかも、初期の歴代総督は、植民地が貿易によつて必要以上の利益をもたらすことがないよう造船規制遵守を堅持するようイギリス政府から指示されている。

(4) たとえ、海軍用建材・麻がとれたとしても、ノーフォーク島、ニュージラランド及びオーストラリアから運送するコストは割高すぎるのではないか。距離の暴虐が逆に作用するのではないか(ブレインニーは、オーストラリアからみた場合の「距離の暴虐」を強調するが、イギリスからみると逆もまた真なのである)。

二百年程前の歴史にすぎぬことに不明な点が、原因・目的に関して多いようだが、こうした議論は、オーストラリア史に対する好事家的興味を持つ者にとっては意味があるが、オーストラリア史研究に対しほとんど貢献しないだろうと、この論争自体を冷やかな目で見る者もいる。例えば、Connel and Irving (1980), pp.32-66.

なお、なお、この論争については Blainey (1966) の邦訳 [一九八〇] の第二章を参照していただくのが日本の読者にとつて大変便利と思われる。ブレインニーの太藪説得力のある議論にもかかわらず通説支持者もその反批判に力を入れているが、通説支持者の日本語文献としては、Clark (1963) 邦訳 [一九七八] の第一章を参照されたい。なお、一九七八年以後の議論の展開は、Blainey (1980), ch. 1, および Frost (1980) で知ることが出来る。この論争は、建国二百年を前になお続行するようだ。

(3) 流刑制度については、Shaw (1966) 第一章「アメリカ独立革命以前の犯罪と流刑」および Robson (1965) ch. 1. を参照。なお、これら二著作は、オーストラリアへ送られた囚人の性格・質について詳しい研究を行なっている。それによれば、都市の貧困層、若者が多く、専門の犯罪者も多く、学科を持つ者も多い。女囚は大半が売春婦であつたという。むしろん政治犯、軽犯罪者も含まれてはいたが少数派に属することである。

(4) 例えば、結局、当局によつて拒否されてしまつたが、マトラ (J. M. Matra) による提案が有名である。彼の提案は、アメリカ独立戦争の際の王党派 (The American Royalist) の新しい天地として、また、貿易、海軍用の麻、建材獲得のための基地としてオーストラリア植民を提案している ('A Proposal for Establishing a Settlement in New South Wales, 23 August 1783' in Martin, G. (1978), pp.9-14)。彼は、キャンペン・クックの二七〇年の航海に参加している人物である。彼は、その後、政府が流刑植民地として計画を立てていることを知り、二つの目的を合体させた計画を提出 (一七八四年四月) したが、ニュー・サウス・ウェールズは遠すぎて商業・軍事面において利用しにくいという政府の見解をくつがえすことは出来なかつた。このマトラの提案については、Clark (1962) pp.64-65. を参照。似たような提案については、ibid., pp.59-72. を参照。パンクスの提案・報告については、Clark (1960) pp.26-28.

(5) この誤算、誤解も植民決定に与える上で重要な役割を果たしたと Blainey (1980) ch. 1. は主張し、植民地原因・目的論争に新たな一頁を加えようとしている。パンクスの報告は、東オーストラリアで最も気候がよいとされる五月頃のものであつた。いずれにせよ、パンクスの二七〇年の報告から一七八七年の第一船団出発までの間、一度も植民予定地の下調べをしていないというのは不思議なことである。

(6) 第一船団の苦闘ぶりは、多くの歴史家が好んで取り上げる題材であるが、本稿では Crowley (1974) ch. 1 by Shaw, pp.9-14. を参照。なお同時

代人の記録 [Fench (1789) and (1793)] が有益である。本文における植民地の地質、農業については、Robinson [1969]、および Fletcher [1969] & [1976] ch. 3 を参照。囚人の労働力としての質については Shaw [1969]、士官等の質については Steven [1969(a)] pp.120—122 を参照した。

(7) しかしながら、植民地に関して通説批判者が強調したエゾ松や麻の移植、採取の試みは実際に行なわれたし、帆布作りの試みも総督の指揮のもとで行なわれた。第一船団到着後、三週間もたたぬうちに後に第三代総督となったキングをノーフォーク島に派遣し領土化している。しかしながら、エゾ松の質が思っていたほどのものでなかったこと、麻の移植の失敗などがあり、これらの試みは成功しなかった。植民の基本的計画書(Heads of a Plan)には、ニュージーランドの麻・木材、ノーフォーク島の木材などの伐切・移植などの軍事目的も最後に述べてある。この計画書の最後の部分が植民目的・原因論争の火種となっているのである。これについては Martin, G. [1978] 所収の各論文、Walsh [1963] を参照。なお計画書全文は Martin, G. op. cit. pp.28—29. に所収されている。

(8) 外部との貿易が開始されたのは、一七九二年である。その年の六月、カルカタより輸送船「アトランティック」が到着、一〇月には東インド会社より一隻、一月には英国より補給船が到着している。なお、一七八八年から一八〇〇年の間、囚人輸送船は四三隻が到着し、七四八六名(内七五六名死亡)を上陸させている (Clark [1962] pp.129—130. および Souter [1982])。

(9) 恩赦には二種類あった。一は「完全恩赦 (Absolute Pardons)」、他は条件付恩赦 (Conditional Pardons) である。前者は、恩赦を受けた時点で、自由の身となり、イギリスへ帰ることも許される。後者は、本来の刑期が終了するまで植民地に留まっていなければならない。後の時代には、元囚人全てをエマシピストという習慣が出来たが、元囚人 (ex-convicts) とエマシピストでは、社会的評価が多少異なっていた (Clark [1962] p. 125.)。

(10) 植民地におけるニュー・サウス・ウェールズ軍団の活動についての研究も多いが、本稿は以下の文献に多くを負う。Abbott [1969 (a)], Fletcher [1976] ch. IV. および Clark [1962] ch. 8, pp. 132—159.

(11) 総督キングと植民地貿易のコンビは Abbott [1969 (a)] および [1969 (b)] を参照。なお、キング総督の緊縮財政(一八〇一—一八〇六年)とハンター財政の比較は下表の通りである。

(12) オーストラリアの初期産業・貿易が海産物に関連していることを強調したのは Blainey [1961] および [1966] ch. 5. であり、とくに捕鯨産業が造船工業の発達を促し、植民地に与えた大きな影響を強調した。しかし、Little [1969] は、Blainey および Steven [1969(b)] の結論に対して懐疑的である (pp. 121—122.)。なお、Steven [1965] および Hainsworth [1981, 2nd ed.] は、植民地貿易について多くの示唆を与える。

(13) 羊は、従来、植民地においては食肉用として重要がられており、羊肉の価格

大蔵省手形発行量の変遷 (NSW, 1795—1806)

	(£)
1795	37,240
1796	28,619
1797	14,909
1798	26,407
1799	43,448
1800	50,707
1801	17,267
1802	17,837
1803	21,465
1804	19,298
1805	32,351
1806	13,972

資料出所: Abbott, 'Economic Growth', in Abbott & Nairn (eds), *Economic Growth of Australia 1788—1821*, 1969, p. 149

- は植民地内において高く、リスクの多かつた羊毛産業へ手を出そうとする者は当初少なかった。本格的な試みはマッカーサーおよび牧師マースデン (Samuel Marsden) によつて開始された (Shaw [1980] pp.30—31)。この点については、Beever [1965] がさらに詳しい議論を行なっている。
- (14) 植民地貿易に対する障害およびその克服過程については以下の論文に多くを負う。東インド会社、航海条例については Fieldhouse [1969]、アザマン、捕鯨産業については Steven [1969(a)] および [1969(b)]。羊毛産業については Roberts [1935] ch. 2, pp.35—48, を参照。
- (15) この反乱は、ラム酒の取引制限を一つの引き金としているため「ラム酒の反乱」と呼称されることが多い。総督ライは、一七八九年四月、タヒチの近くの海域で起きた「パウンティ号の反乱」の当事者、すなわちパウンティ号の船長であつた。彼は性格的にも他人と対立することが多かつたとされる。それ故に、小農の中にも対立する者がかなりあつた (Clark [1962] p. 210—234)。ラム酒の反乱については、Dryatt [1938] および Fletcher [1968] を参照。
- (19) マッカーサーは一八〇九年植民地を離れ、一八一七年に帰還している。その間、妻のエリザベスが牧場を運営していた。マッカーサーの業績については Roberts [1935] および Abbott [1969 (a)] を参照。
- (17) トーマス・バグの植民地における調査とその報告書が、ニュー・サウス・ウェールズの植民地の發展の方向を大きく変える転機となつた (Clark [1962] pp.367—379)。バグの報告書は左の通りである。
- (1) On the State of the Colony of New South Wales (1822)
- (ii) On the Judicial Establishments in New South Wales and Van Diemen's Land (1823)
- (iii) On the State of Agriculture and Trade in the Colony of New South Wales (1823)
- (18) 植民地内の工業の發展については、Walsh [1963] および [1969] がさらに詳しい議論を展開している。輸入品の輸送コストを考えると、植民地内に輸入代替品工業を發展させる余地は十分あつたが、結局、輸入不可能なビール醸造産業などの發展がみられただけであり、ゴールド・ラッシュを迎える一八五〇年代まで停滞的であつたと見えよう。
- (16) オーストラリアが機會の國 (a land of opportunity) とイギリスにおいて認識されるようになったのは、一八一〇年代の後半からであり、「ジェントルメンズ・マガジン (the Gentlemen's Magazine)」(February 1817) などがイギリス人の関心をおおりに立つた (Clark [1962] pp.331—332)。
- (20) Clark の示唆する数字によれば、下表の通りになるが、全部が五〇〇ポンド以上の資本を持つた中産階級であつたわけではなから (Clark [1968] pp. 13—16)。しかし、大部分は植民地のジェントリー階層を形成したといつてよいであらう。
- (21) 植民地内の政治制度・裁判制度の變遷、變革過程については、以下の論稿に多くを負う。
- McMinn [1979] chs. 1 & 2 および Hartwell [1965]。
- (22) 羊・牛の牧畜業の拡大にともなう植民地の拡大、および植民地治安状況の悪化とそれに対

ニュー・サウス・ウェールズおよびバン・ディメンズ・ランドへの移民者の数 (1822—30年)

1822	875
1823	543
1824	780
1825	485
1826	903
1827	715
1828	1,056
1829	1,005
1830	772

数字は Clark, *A History of Australia*, vol. 2, 1968, p. 16

する植民地政府の書信でこのことは、Roberts (1935) chs. 5 & 6. を参照。

(23) 囚人流刑は、引き続きマヌ・マヌ・ローメンス・マウンドに対して行なわれたが、ゴールド・ラッシュ開始とともに自由人が増えたため一八五二年に中止された。しかし、順調な発展を遂げた東海岸の植民地に対し、一八二九年のヌワン・リバー植民以来、不調であった植民活動を救済するために、西オーストラリア植民地は、囚人流刑制を導入することとした。一八五〇年に流刑が開始され、一八六八年まで続けられた。一七八八年から一八六八年の約八〇年の間にマヌ・マヌに送り込まれた囚人の数は約一六万人とされている。以上の点については前注(23)の示す文献を参照。

引用文献リスト

英文文献

- Abbott, G. J., and Nairn, N. B., eds., 1969, *Economic Growth of Australia 1788—1821*, Melbourne U. P., Melbourne.
- _____, 1969(a), 'Economic Growth' in Abbott and Nairn, eds.
- _____, 1969(b), 'Governor King's Administration', in Abbott and Nairn, eds.
- _____, 1969(c), 'The Pastoral Industry', in Abbott and Nairn, eds.
- Australian Population and Immigration Council, 1977, *Immigration Policies and Australia's Population: A Green Paper*, A. G. P. S., Canberra.
- Australian Population and Immigration Council & Australian Ethnic Affairs Council, 1979, *Multiculturalism and its Implications for Immigration Policy*, A. G. P. S., Canberra.
- Babbage, R., 1980, *Rethinking Australia's Defence*, University of Queensland Press, St. Lucia.
- Baker, D. W. A., 1964, 'The Origins of Robertson's Land Acts' in *Historical Studies Selected Articles: First Series*, Melbourne U. P., Melbourne.
- Beever, E. A., 1965, 'The Origin of the Wool Industry in New South Wales', in *Business Archives and History*, Vol. V, No. 2.
- Birch, A., 1965, 'The Implementation of the White Australia Policy in the Queensland Sugar Industry 1901—12', in A. E. H. R., Vol. XI, No. 2.
- Birrell, R. and Birrell T., 1981, *An Issue of People: Population and Australian Society*, Longman Cheshire, Melbourne.
- Blaney, G., 1961, 'Gold and Governors' in *Historical Studies*, No. 36.
- _____, 1962, 'The Gold Rushes: The Year of Decision' in *Historical Studies*, No. 38.

- _____, 1963, *The Rush That Never Ended: A History of Australian Mining*, Melbourne U. P., Melbourne, (3rd ed., 1978).
- _____, 1964, 'Technology in Australian History' in *Business Archives and History*, Vol. IV, No. 2.
- _____, 1966, *The Tyranny of Distance: How Distance Shaped Australia's History*, Sun Books, Melbourne.
- _____, 1980, *A Land Half Won*, Macmillan, Melbourne.
- Boehm, E. A., 1971, *Prosperity and Depression in Australia 1887—1897*, Oxford U. P., London.
- _____, 1979 (2nd ed.), *Twentieth Century Economic Development in Australia*, Longman Cheshire, Melbourne, (1st ed., 1971).
- Bolton, G., 1981, *Spoils and Spoilers: Australian Experience*, Geroge Allen & Unwin, Sydney.
- Bureau of Industry Economics, 1978, *Industrialisation in Asia—some implications for Australian Industry*, A. G. P. S., Canberra.
- _____, 1979, *Australian industrial development—some aspects of structural change*, A. G. P. S., Canberra.
- _____, 1979, *Employment of demographic groups in Australian industry*, A.G.P.S., Canberra.
- _____, 1981, *The long-run impact of technological changes on the structure of Australian industry to 1990—91*, A. G. P. S., Canberra.
- _____, 1981, *The structure of Australian industry—past development and future trends*, A. G. P. S., Canberra.
- Butlin, N. G., 1976, *Investment in Australian Economic Development 1861—1900*, Australian National U. P., Canberra (Melbourne U. P. edition, 1964).
- Cannilleri, J. A., 1980, *Australian-American Relations: the web of Dependence*, Macmillan Australia, Melbourne.
- Cannon, M., 1966, *The Land Boomers*, Melbourne U.P., Melbourne.
- Chal Vinson, J., 1962, 'The Imperial Conference of 1921 and the Anglo-Japanese Alliance', in *Pacific Historical Review*, No. 3.
- Clark, M., 1950, *Select Documents in Australian History 1788—1850*, Vol. 1, Angus and Robertson, Sydney.
- _____, 1955, *Select Documents in Australian History 1851—1900*, Vol. 2, Angus and Robertson, Sydney.
- _____, *A History of Australia*, Melbourne U.P., Melbourne.
- _____, Vol. 1, 1962, From the Earliest Times to the Age of Macquarie.
- _____, Vol. 2, 1968, New South Wales and Van Diemen's Land 1822—1838.
- _____, Vol. 3, 1973, The Beginning of an Australian Civilization 1824—1851.
- _____, Vol. 4, 1978, The Earth Abideth for Ever 1851—1888.

- Vol. 5, 1981, *The People Make Laws 1888—1915*.
 _____, 1980, *A Short History of Australia*, 2nd ed. Mentor Book, Sydney (1st ed., 1963).
 _____, 1980, *Occasional Writings & Speeches*, Fontana Books.
 Cochrane, P., 1980, *Industrialization and Dependence: Australia's Road to Economic Development*, University of Queensland, St. Lucia.
 Connel, R. W. and Irving, T.H., 1980, *Class Structure in Australian History: Documents, Narrative and Argument*, Longman Cheshire, Melbourne.
 Gordon, W. M., 1963, 'The Tariff in A. Hunter ed., *The Economics of Australian Industry*, Melbourne U. P., Melbourne.
 Crawford, R. M., 1979, *Australia*, 4th ed., Hutchinson of Australia, Melbourne (1st ed., 1952).
 Crowley, F. K., ed., 1974, *A New History of Australia*, Heinemann, Melbourne.
 _____, ed., *A Documentary History of Australia*. Thomas Nelson Australia, Melbourne.
 Vol. 1, 1980(a), Colonial Australia 1788—1840.
 Vol. 2, 1980(b), Colonial Australia 1841—1874.
 Vol. 3, 1980(c), Colonial Australia 1875—1900.
 Vol. 4, 1978(a), Modern Australia 1901—1939.
 Vol. 5, 1978(b), Modern Australia 1939—1970.
 Dabscheck, B. and Niland, J., 1981, *Industrial Relations in Australia*. George Allen & Unwin, Sydney.
 Dallas, K., 1952, 'The First Settlements in Australia' in *Tasmania Historical Research Association Paper*, No. 3, and also in G. Martin ed., *The Founding of Australia*, 1978.
 _____, 1955, 'The Origins of White Australia' in *Australian Quarterly*, Vol. 27, No. 1.
 Department of Immigration and Ethnic Affairs, 1979, *Australian Immigration, Consolidated Statistics*. A. G. P. S., Canberra.
 Dignen, D. K., 1967, 'Australia and British Relations with Japan 1914—1921', in *Australian Outlook*, No. 21.
 Ewatt, H. V., 1938, *Rum Rebellion; A Study of the Overthrow of Governor Bligh by John Macarthur and the New South Wales Corps*, Angus & Robertson, Sydney.
 Farrer, K. T. H., 1980, *A Settlement Amply Supplied: Food Technology in Nineteenth Century Australia*, Melbourne U. P., Melbourne.

- Fieldhouse, D. K., 1969, 'British Colonial Policy', in Abbott and Nairn, eds.
- Fitzhardinge, V., 1965, 'Russian Ships in Australian Waters 1807-1835', in *J. R. A. H. S.*, Vol. 51, Part 2.
- _____, 1966, 'Russian Naval Visitors to Australia 1862-1888', in *J. R. A. H. S.*, Vol. 52, Part 2.
- Fitzpatrick, B. C., 1941, *The British Empire and Australia 1852-1900*, Melbourne U. P., Melbourne (reissued Sydney U. P., Sydney, 1971).
- Fletcher, B. H., 1964, 'The Development of Small-scale Farming in New South Wales under Governor Hunter', in *J. R. A. H. S.*, Vol. 50, Part 1.
- _____, 1965, 'Gross, Paterson and the Settlement of the Hawkesbury', in *J. R. A. H. S.*, Vol. 51, Part 4.
- _____, 1968, 'The Hawkesbury Settlers and the Rum Rebellion', in *J. R. A. H. S.*, Vol. 54, Part 3.
- _____, 1969, 'Agriculture', in Abbott and Nairn, eds.
- _____, 1976, *Landed Enterprise and Penal Society: A History of Farming and Grazing in New South Wales before 1821*, Sydney U. P., Sydney.
- Ford, G. W. et al., 1976, 'A Study of Human Resources and Industrial Relations at the Plant Level in Seven Selected Industries', in Committee to Advise on Policies for Manufacturing Industry, *Policies For Development of Manufacturing Industry*, Vol. 4.
- Forster, C., 1970, 'Economies of Scale and Australian Manufacturing', in Forster, ed., *Australian Economic Development in the Twentieth Century*, George Allen & Unwin, London.
- Frenkel, S. J., ed., 1980, *Industrial Action: Patterns of Labour Conflict*, George Allen & Unwin, Sydney.
- Frost, A., 1980, *Convicts and Empire: A Naval Question 1776-1811*, Oxford U. P., Melbourne.
- Gollan, R., 1966, *Radical and Working Class Politics: A Study of Eastern Australia 1850-1910*, Melbourne U. P., Melbourne.
- Greenwood, G., ed., 1974, *Australia: A Social and Political History*, Angus & Robertson, Sydney.
- _____, 1976, 2nd ed., *The Future of Australian Federalism: A Commentary on the Working of the Constitution*, University of Queensland, St. Lucia. (1st ed., 1946).
- Hainsworth, D. R., 1981, 2nd ed., *The Sydney Trader*, Melbourne U. P., Melbourne (Cassel, 1st ed., 1972).
- Hartwell, R. M., 1974, 'The Pastoral Ascendancy 1820-1850', in Greenwood, ed.
- Hyde, J., 1978, *Australia: The Asia Connection*, Kibble Books, Melbourne.

- Industries Assistance Commission (IAC), 1977, *Annual Report 1976-77*, A. G. P. S., Canberra.
- _____, 1980, *Approaches to General Reductions in Protection*, Information Paper No. 1, Trends in the Structure of Assistance to Manufacturing, A. G. P. S., Canberra.
- _____, 1981, *Annual Report 1980-1981*, A. G. P. S., Canberra.
- Isaac, J. E., 1980, 'Industrial Democracy in the Context of Conciliation and Arbitration', in Lansbury ed.
- Joyce, A., 1942, *A Homestead History 1843-1864*, Oxford U. P., Melbourne.
- Kasper, W., 1978, 'Some Broad Perspective of World Economic Growth', in Kasper and Parry, eds., *Growth Trade and Structural Change in an Open Australian Economy*, Centre for Applied Economic Research, University of New South Wales.
- Kellaway, C., 1953, 'White Australia—How Political Reality Became National Myth', in *Australian Quarterly*, Vol. 25.
- Lansbury, R. D., 1980, *Democracy in the Work Place*, Longman Cheshire, Melbourne.
- Little, B., 1969, 'Sealing and Whaling in Australia before 1850' in A. E. H. R., Vol. IX, No. 2.
- Manning, H. T., 1974, 'The Present State of Wakefield Studies', in *Historical Studies*, No. 36.
- Markus, A., 1979, *Fear & Hatred, Purifying Australia & California 1850-1901*, Hale & Iremonger, Sydney.
- Martin, G., 1978, *The Founding of Australia: The Argument about Australia's Origins*, Hale & Iremonger, Sydney.
- Martin, J. I., 1978, *The Migrant Presence; Australian Resposes 1947-1977*, George Allen & Unwin, Sydney.
- _____, 1981, *The Ethnic Dimension*, (edited by S. Encel), George Allen & Unwin, Sydney.
- McCarran, T., 1982, 'Economists show little optimism for '82', in *Sydney Morning Herald*, January 7.
- McCarty, J. M., 1974, 'Australian Capital Cities in the Nineteenth Century', in McCarty and Shedvin, eds., *Urbanization in Australia*, Sydney U. P., Sydney.
- McCarty, J., 1976, *Australia and Imperial Defence 1918-39; A Study in Air and Sea Power*, University of Queensland Press, St. Lucia.
- McMinn, W. G., 1979, *A Constitutional History of Australia*, Oxford U.P., Melbourne.
- McNaughtan, 1974, 'Colonial Liberalism 1851-92', in Greenwood, ed.
- Meaney, N. K., 1976, *The Search for Security in the Pacific 1901-1914*, Vol. 1, Sydney U. P., Sydney.
- Merritt, J. A., 1973, 'W. G. Spence and the 1890 Maritime Strike' in *Historical Studies*, No. 60.
- Murphy, P. B., 1980, 'Australia and Japan in the Nineteen Thirties', in J. R. A. H. S., Vol. 65, Part 4.

National Times Survey Report, 1981, *The Survival of White Australia*.

Part 1. by Wynhausen, E., 'Report from Cabramatta, September, 13 to 19.

Part 2. by Heinrichs, Wynhausen and McCarthy, 'Race and the Politics of Work', September 20 to 26.

Part 3. by Horin, A., 'Broom : A Melting Pot in Lotus-land' September 29 to October 3.

Nairn, N. B., 1956, 'A Survey of the History of the White Australia Policy in the 19th Century', in *Australian Quarterly*, Vol. xxviii, September.

_____, 1962, 'The 1890 Maritime Strike in New South Wales', in *Historical Studies*, No. 37.

_____, 1967, 'The Role of the Trades and Labour Council in New South Wales 1871-1891', in *Historical Studies Selected Articles*;

2nd Series, Melbourne U. P., Melbourne.

Niland, J., 1968, 'The Birth of the Movement an Eight Hour Working Day in New South Wales', in *A. J. P. S.*, Vol. 14, No. 1.

Norris, R., 1975, *The Emergent Commonwealth—Australia Federation Expectation and Fulfilment 1839-1910*, Melbourne U. P., Melbourne.

Nish, I. H., 1963, 'Australia and the Anglo-Japanese Alliance 1901-1911', in *A. J. P. S.*, Vol. 9, No. 2.

O'Connor, J. E., 1967, '1890—A Turning Point in Labour History ; A Reply to Mrs. Phillip', in *Historical Studies Selected Articles*;

2nd Series, Melbourne U. P., Melbourne.

Phillip, J., 1967, '1890—The Turning Point in Labour History?', in *Historical Studies Selected Articles*; *2nd Series*, Melbourne U. P., Melbourne.

Piggin, F. S., 1971, 'New South Wales Pastoralists and the Strikes of 1890-1891', in *Historical Studies*, No. 56.

Pike, D., ed., *Australian Dictionary of Biography*;

Vol. 1, 1788-1850 A-H, 1966.

Vol. 2, 1788-1850 I-Z, 1967.

Melbourne U. P., Melbourne.

_____, 1970, 2nd. ed., *Australia; the Quiet Continent*, Cambridge U. P., Cambridge (1st ed., 1962).

Plowman, D., Deery, S. and Fisher, C., 1980, *Australian Industrial Relations*, McGraw-Hill book, Sydney.

_____, 1981, *Wage Indexation; A Study of Australian Wage Issues 1975-1980*, George Allen & Unwin, Sydney.

Port, L. (with Brian Murray), 1978, *Australian Inventors*, Cassell Australia, Sydney.

- Powell, J. M., 1970, *The Public Lands of Australia Felix. Settlement and Land Appraisal in Victoria 1834-91 with special Reference to the Western Plains*, Oxford U. P., Melbourne.
- Pritchard, R. L., 1980, 'The Legal Framework in Australia for Industrial Democracy', in Lansbury, ed.
- Roberts, S. H., 1935, *The Squatting Age in Australia 1835-1847*, Melbourne U. P., Melbourne.
- Robinson, K. W., 1969, 'Land', in Abbott and Nairn, eds.
- Robson, L. L., 1965, *The Convict Settlers of Australia*, Melbourne U. P., Melbourne.
- Serle, J., 1963, *The Golden Age; A History of the Colony of Victoria 1851-1861*, Melbourne U. P., Melbourne.
- _____, 1971, *The Rush to be Rich; A History of the Colony of Victoria 1883-1889*, Melbourne U. P., Melbourne.
- Shann, E. O. G., 1929, *An Economic History of Australia*, Cambridge U. P., (Reissued Georgian House, Melbourne, 1963).
- Shaw, A. G. L., 1977, *Convicts & the Colonies*, Melbourne U. P., Melbourne (1st ed., by Faber & Faber, London, 1966).
- _____, 1969, 'Labour' in Abbott and Nairn eds.
- _____, 1971, 'Some Aspects of the History of N. S. W. 1788-1810', in *J. R. A. H. S.*, Vol. 57, June.
- _____, 1980, 7th ed., *The Economic Development of Australia*, Longman Cheshire, Melbourne (1st ed., 1944).
- Sinclair, W. A., 1971, 'The Tariff and Economic Growth in Pre-Federation Victoria 1860-1900', in *Economic Record*, Vol. xlvii.
- _____, 1976, *The Process of Economic Development in Australia*, Cheshire, Melbourne.
- Sissons, D. C., 1972, 'Immigration in Australia-Japanese Relations 1871-1971', in Stockwin J. A., ed., *Japan and Australia in the Seventies*, Angus & Robertson, Sydney.
- _____, 1977(a), 'Karayuki-san: Japanese Prostitutes in Australia 1867-1916, (I and II)', in *Historical Studies*, Vol. 17, No. 68 and 69.
- _____, 1977 (b), 'Japanese in the Northern Territory 1884-1902' in *South Australiana*, Vol. 16, No. 1.
- Souter, G., 1982, 'An Unspeaking Journey to Remember Next Tuesday' in *Sydney Morning Herald*, January 23.
- Steven, M. J. E., 1965, *Merchant Campbell 1769-1846*, Oxford U. P., Melbourne.
- _____, 1969(a), 'Enterprise', in Abbott and Nairn, eds.
- _____, 1969 (b), 'The Changing Pattern of Commerce', in Abbott and Nairn, eds.
- _____, 1969 (c), 'Exports other than Wool', in Abbott and Nairn, eds.
- Tench, W., 1789, *A Narrative of the Expedition to Botany Bay*,

- 1793, *A Complete Account of the Settlement at Port Jackson, in New South Wales*.
 (Both in W. Trench, *Sydney's First Four Years*, Library of Australian History, Sydney, 1979.)
- Thompson, R. C., 1980, *Australian Imperialism in the Pacific: The Expansionist Era 1820—1920*, Melbourne U. P., Melbourne.
- Turner, I., 1978, 2nd ed., *In Union is Strength; A History of Trade Unions in Australia 1788—1978*, Thomas Nelson, Melbourne (1st ed., 1976).
- Walker, K. F., 1970, *Australian Industrial Relations Systems*, Harvard U. P., Massachusetts, 1970.
- Walker, R., 1968, 'The Maritime Strikes in South Australia 1887 and 1890', in *Labour History*, No. 14, 1968.
- Walsh, G. P., 1963, 'The Geography of Manufacturing in Sydney 1788—1851', in *Business Archives and History*, Vol. 3, No. 1.
 1969, 'Manufacturing', in Abbott and Nairn, eds.
- Ward, R., 1966, *The Australian Legend* (2nd ed.), Oxford U.P., Melbourne, (1st ed., 1958).
- Ward, R. and Robertson, J., eds., *Such Was Life: Select Documents in Australian Social History*:
 Vol. 1, 1788—1850, 1978.
 Vol. 2, 1851—1913, 1980.
 Alternative Publishing, Chippendale.
- Willard, M., 1923, *History of the White Australia Policy to 1920*, Melbourne U.P., Melbourne.
- Yarwood, A. T., 1968, *Attitudes to Non-European Immigration*, Cassel Australia, Melbourne.
- Abbreviations:
- A. E. H. R., *Australian Economic History Review*
- A. J. P. H., *Australian Journal of Politics and History*
- R. A. H. S. J. or J. R. A. H. S., *Journal of the Royal Australian Historical Society*
- A. G. P. S., *Australian Government Publishing Service*

日本語文献

- (シリー・フライ(五味俊樹訳)「環太平洋の間接的同盟——バックス・ブリタニカとバックス・アメリカーナの下での日豪関係」(日本国際政治学会編『国際政治』第六八号、一九八一年)
- 福嶋輝彦『貿易転換政策』と日豪貿易紛争(一九三六年)——オーストラリア政府の日本製織物に対する関税の引上げをめぐる(日本国際政治学会編

『国際政治』前出。

池間誠「オーストラリアの関税政策」(琴野孝編『現代オーストラリア経済の研究』アジア経済研究所、東京、一九七四年)。

小島清/日豪調査委員会編『豪州経済ハンドブック』(日本経済新聞社、東京、一九八一年)。

琴野孝「オーストラリアにおける労働市場と賃金裁定制度をめぐる諸問題」(琴野孝編『現代オーストラリア経済の研究』前出)。

琴野孝「第二次大戦後におけるオーストラリアの工業化」(琴野孝編『現代オーストラリア経済の研究』前出)。

ネヴィル・メイニー(赤根谷達男訳)『黄禍論』と『オーストラリアの危機』——オーストラリア外交政策史における日本、一九〇五—一九四一年」(日本国際政治学会編『国際政治』前出)。

本岡武「日豪経済関係論序説——研究の方法と課題」(追手門学院大学オーストラリア研究所編『オーストラリア研究紀要』第六号、一九八〇年)。

P・B・マーフィー(福嶋輝彦訳)「太平洋協定とオーストラリアの安全保障(一九二—三七年)」(日本国際政治学会編『国際政治』前出)。

成田勝四郎編著『日豪通商外交史』(新評論、東京、一九七一年)。

押元直正「タースデー物語——オーストラリアで活躍した日本人——」(国際協力事業団編『移住研究』第一号、一九七五年二月)。

佐藤恭三「一九三〇年代後半のオーストラリア外交——コモンウェルスと太平洋国家意識の狭間——」(日本国際政治学会編『国際政治』前出)。

関根政美「幕末・明治前期日本の初期工業化過程に関する若干の考察(その一)」(『法学研究』第五三巻第四号、一九八〇年)。

D・C・S・シンズ(押元直正訳)「ある移民の一族」(国際協力事業団編『移住研究』第一六号、一九七九年)。

竹田いさみ「白豪政策の成立と日本の対応——近代オーストラリアの対日基本政策——」(国際政治学会編『国際政治』前出)。

谷口重吉「オーストラリアの関税委員会」(追手門大学オーストラリア研究所編『オーストラリア研究紀要』第一号、一九七五年)。

谷口重吉「オーストラリアの産業助成委員会」(追手門大学オーストラリア研究所編『オーストラリア研究紀要』第二号、一九七六年)。